第４章

これからの課題

おはなしびっくり箱

上の原児童館で絵本の読み聞かせの会として活躍しています

浅川 良美

このグループが誕生したのは、いまから５年前。地域の子供達の健やかな成長のために、お母さん方のもっている能力を生かしていきたい、そして、母親同士のつながりをもっと大切にしていきたいという、幼児グループの先生と母親達の思いから生まれたものです。この会は、乳幼児期の感性が育つ時期に、絵本や紙芝居などを通して、子供達の情操を豊かにする事や、本好きな子になってもらうために、図書活動のきっかけをつくり、また、親同士の交流や、活動の発展等を主旨として、まず自分達が出来ることから始めました。

日頃、家で夜寝る前などに、我が子に絵本を読んで聞かせるように、普通のお母さん達が児童館に来てくれる子供達に、温かく読み聞かせをしたいと思いスタートしました。

現在では、毎日第４水曜日、午後２時30分から３時頃まで、上の原児童館の二階の図書室に、ジュータンをしき、子供達を座らせて行っています。毎回３～４人のメンバーが、思い思いの絵本や紙芝居、手作りのペープサートや人形劇を行い、つなぎとして手遊び、なぞなぞ、折り紙などをして、子供達と一緒に楽しいひとときを過ごしています。帰りには、子供達が作ったものや、メンバーの手作りの、ささやかなおみやげも渡しています。また、毎年12月には、全員が集まって、クリスマス会を開いています。司会、出し物企画、プレゼントの作成など、皆が様々なアイデアや力を合わせて、毎回趣向を凝らした会を行っています。多い年は、250名以上の子供達やそのお母さん達が見に来てくださって、メンバー一同、大変感激して、今後の励みになりました。２年ほど前から、もっと子供達に喜んでもらえるものを演じたいという気持ちから、年２回中野区から補助金を頂いて講師の先生をお招きして、講演会や勉強会を行っています。

おはなしびっくり箱がここまで活動してこれたのも。メンバーのチームワークもさることながら、児童館の先生方の全面的なバックアップと、毎回見に来て下さる子供達とお母さん方のお陰と、心から感謝いたしております。今後この会が発展できるよう、小さいお子さんのお母さん方の入会を、メンバー一同心から望み、お待ち致しております。

「まつりでポン」にかかわって

江古田児童館行事『まつりでポン』多くの大人と子どもの実行委員が活躍しています

篠岡　淑子

私が「まつりでポン」にかかわったきっかけは、青少年委員になってからで、かれこれ６、７年にもなります。そのころは日曜日に行われていました。いろいろ楽しいコーナーのある中、学童クラブ父母会の皆さんが、もちつきをされていたのが印象的でした。私はお菓子コーナーで、クレープやお汁粉などを受け持ちました。こちらがあまり手を出さなくても、子どもたちはかわいらしいエプロンを着け、ちょっと得意げに作ったり、売り子さんなどをしている姿が思い出されます。

回を重ねるごとに、地域のお年よりの「大きな紙芝居」や「割箸てっぽう」、中高生の参加、また、最近は幼稚園前のお子さんを持つお母さん方が、意欲的に活動されるようになりました。個人として首を突っ込んだ私も、「江古田４丁目町会子どもと共に進む会」という団体の仲間も加わるようになり前回は400人分のとん汁を作りましたが、なにしろ家庭で作る分量とは大違いなので、最後の子には具が足りなくなりあわててしまいました。今回は、経験を踏まえ、おいしいすいとんができました。

なにげなく交わす子どもとの言葉のふれあい、また大人同士のかかわりあいは楽しいものです。　異年齢集団での外遊びが少なくなった近年、子どもらしい活気あふれるまつりが、今後とも多くの人との協力で行われることを願っています。

児童館誕生から25年の節目にその歴史を振り返り、わたしたちがなしてきたことを検証し、これからの進むべき道を探ることが今回の冊子づくりの目的でもあった。過去から見えて来る課題もあれば、先を見通して、今考えなくてはならない課題もある。そこで、ここではこれからの課題として以下の４点をあげておきたい。

1　子どもたちに豊かな直接体験の機会を

この25年を振り返ると、子どもたちの置かれた状況はどんどん悪化してきている。40年代後半から、都市化により遊び空間が失われ、自由に遊べる時間がなくなり、遊び仲間が少なくなってきていた。いわゆる「３つの間（サンマ）」の喪失といわれた現象が始まっていた。それでもまだそのころの児童館ではじっくり遊ぶこともできた。大勢の子どもたちが、ドッジボールやなわとび、バドミントンなどで時間を忘れて遊んでいた。行事の実行委員会のためには親を説得して塾やお稽古の日を変更したり、家族旅行から一人早帰りをしたりと子どもたちは、自分のやりたいことを実現するため仲間との約束を守り、責任を果すため努力もし、また、それがまだ可能でもあった。

しかし、50年代後半には児童館や学童クラブにも子どもたちを取り巻く状況の厳しさが迫って来た。放っておいたら集団では遊べない子どもたちが増えてきた。外遊びが減り、家の中での遊びが増えてきた。このころには、危機感を感じた職員たちによって集団遊びに関する職員研究会が続けられ、日々の活動のなかでも、「集団遊びデー」等と称して意識的に集団づくりに取り組む館が増えていた。

そして、今、その集団遊びの時間の成立すら困難になってきている。忙しい子どもたちは時計とニラメッコしながら遊び、そのうちバラバラといなくなってしまう。中途半端な時間しかないならとますます家のなかに引きこもりがちになってしまう。その結果、子どもの状況は「３つの間」の喪失に加えて、「人間関係が希薄」、「体格はよくなったが体力はない」、「自分さえよければよいと思っている」、などと言われるようになってきている。２１世紀を担う子どもたちが、このまま大人になったとき、どのような社会になってしまうのだろうか。

少子化の中、親は自分の将来を託す子どもには、少しでもいい教育を与え、

安定した生活を送ってほしいという思いが強く、子どもはますます塾やお稽古へと追いまくられている。そのため、自由な時間の中で育まれるべき、創造性や想像力、異年齢の仲間との遊びや活動を通して培う社会性、他人への思いやりなど豊かな人間性を育てることが非常に困難になっている。

また、子どもたちは、さまざまな情報をマス・メディアを通じて入手し、その情報を頭のなかに知識としてのみ詰め込んでしまっている。直接体験のないまま、知識だけは豊富な子どもが増えている。感動体験のないまま、心で感じることのできない子どもが増えている。

このような状況のなかで今、子どもたちに必要なことは、子ども時代にしか経験できない豊かな生活体験を増やすこと、自由な時間をもち、異年齢の仲間との関わりのなかで、心を解きほぐせる遊びや活動を体験することではないだろうか。また、社会性を培うためには、人は社会のさまざまな事象や人々との関わり合いのなかで生きているということを直接体験させることが必要である。これらのことは児童館が大事な目標としてきたことであり、また、実際に力を入れて実施してきたことでもある。そして、これからも児童館は、いつでも気軽に、このような活動体験ができる数少ない場なのである。児童館のこのような機能を活かし、子どもたちに今必要な生活体験をさせるためには、子どもたちが児童館の活動にもっともっと参加できるよう、彼らに自由な時間を取り戻してあげることが不可欠なのである。さらに、そのためには、児童館の中で、創意工夫して魅力あふれる活動を作り出していくとともに、親にもその大切さを理解してもらうこと、親子ぐるみの活動を通して親にも身をもってその楽しさを知ってもらうことがまず大事なのではないだろうか。

2　子育てネットワークの拠点として

幼児グループや学童クラブを通して関わってきた親たちが「変わってきた」と感じることが多くなってきた。「子どものため」とか「子どもが喜ぶから」と運動会、クリスマス会、お別れ会の企画・準備・実行をしたり、交替でお母さん先生をしたり、児童館まつりなどの行事へも店を出したりと楽しみながら活動していた母親たちが、10年位前から変わりはじめた。さまざまな活動を提起しても、「めんどうだから」、「疲れるから」、「プレゼントは買ったほうが早いのでは」などと否定的な声が聞かれるようになってきた。

それでも活動を始めれば、子どもが病気でも自分は活動のつづきをするために幼児グループへ来る程熱心にはなるのだが、さまざまな受け止め方がある中では提案の仕方に気を使わざるを得なくなってきている。

また、学童クラブでも親と職員が共に子育てをしていくのだという意識が親の側に薄れ始め、保護者会や連絡帳で子どもの問題を提起しても反応が鈍くなったと感じ始めたのも同じく10年位前からだった。

そして、その頃から乳幼児を抱える母親の育児不安が問題になり始めていた。その状況は引き続き、今や出生率はかつてないほど低くなり、国をあげての子育て支援策がとられるほどになってきた。

核家族のなかで育ち、親になるまで赤ちゃんを抱いた経験もなく、まわりに友だちもなく、テレビや育児雑誌の情報に振り回され、マニュアルどおりに育たない子どもに苛々し、落ち込んでしまう。その気持ちを思わず子どもにぶつけ手をあげてしまう「児童虐待」も増え始めている。

このような状況のなかで、児童館は地域の子育てセンターとして、子育て支援の役割を果すことを強く期待されている。児童館や巡回児童館の乳幼児親子対応は、子どもとの遊びを身につけたり、母親同士の育児情報の交換ができたり、また、０歳から３・４歳までの乳幼児を持つ人が集まるため、子育ての先輩からの話を聞くことができ、安心して子育てができると喜ばれている。そして、この事業を通して親同士がつながり、子どもが小学生になっても、中学生になっても子育て仲間としてその時々の悩みを話し合える関係になれると評価されてきた。

これからは、さらに、児童館へ行けば、子どもに関する情報が集まっている、関係機関との必要かつ十分な連携も取れていて、相談に行けば必要に応

じてもっと専門的な機関につなげて貰えるなど、子どものことがトータルに見られ、トータルに対応して貰えるところになることが大切なのではないだろうか。親も子も気軽にやって来て、地域の仲間と遊んだり、しゃべったり、活動したり、気になることが相談できる場、そのような地域ネットワークの核としての子育てセンターになることが望まれているのではないか。

3　子どもの権利が守られ尊重される地域づくりを

平成元年、国連で「子どもの権利に関する条約」が採択された。これはそれまでの「子どもは弱い存在なので守っていかなくては」という子ども観を覆し、子どもを権利の主体と認め、自分の処遇に関することには子ども自身も関与できることとしたものである。そして、そのときの判断基準には、「子どもの最善の利益」を掲げ、親や大人や社会の都合でその処遇が決められるのではなく、その子どもにとってどうなのかという視点できめられなくてはならないとしている。

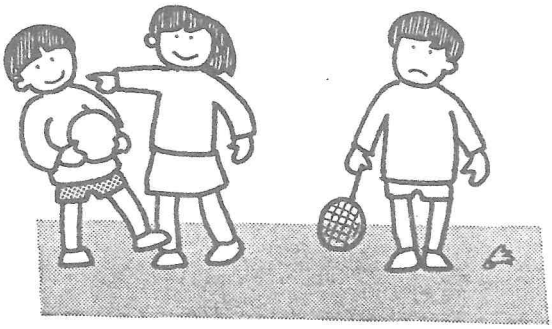
このことを児童館に引き付けてみたとき、果たして現在の児童館、学童クラブの運営は本当に「子どもの最善の利益」という立場で決められているのかという見直しは必要なのではないだろうか。例えば、開館の曜日や時間帯は？遊びや活動の内容や方法は？館内での約束ごとは？ひとつひとつを真剣に点検し、改善策を考えてみたい。

また、児童館内だけでなく、中野のまち全体としてはどうなのだろうと視野を広げて考えることも大切である。地域では？家庭では？公共施設では？学校では？遊び場は？まちそのものは？一体どうなのだろうか。そして児童館は、運営協議会等を中心に多くの地域の人々とともに、地域の現状を調べ、さらに多くの人々へその現状を知らせ、地域ぐるみで「子どもの最善の利益」とは何かを考え、何をしていったらいいのか提案し、行動していくような運動の仕掛け人になることが大切なのではないだろうか。

4　未来をみつめて

児童館の歴史は四半世紀と長いが、その周知のされ方、理解のされ方、支持のされ方という側面でみるとなかなか厳しい道のりだった。その険しさのなかで、職員はパイオニアとしての気概をもって自らに課題を課し、解決策

を提案し、困難と戦いつつ今日の児童館・学童クラブを築いてきた。その厳しい道のりを通して、ある種のかたくなさで身を守ろうとしてしまったときもあったのではないか。児童館の所属する組織が整備され、区のなかでも一定の役割を認められ、さらなる発展を期待されてさまざまな提案がされたとき、何かを押し付けられるのではないかと思わず慎重になりすぎたことはなかったか。職員としての自分たちの姿勢を省みることも必要だろう。

また、「中野区学童クラブあり方懇談会」の報告が近々でる予定になっている。広く世界的視野で子どもの問題をとらえている学識経験者、日々の子どもの関わりのなかで児童館・学童クラブのあり方を思い巡らしている地域の育成者、実感として児童館・学童クラブへ望むことを提案してくれる利用者、また、学校の立場から、女性問題の立場からとさまざまな分野の方々がこれからの児童館・学童クラブのあり方を論じ、提言する予定になっている。児童館はこの提言も真摯に受け止め、２１世紀に向け真に地域の人々に喜ばれる施設になっていかなくてはならない。

児童館誕生から25年経った今、わたしたちはもう一度原点に立ち返り、新たな状況を素早く、そして的確にキャッチし、わたしたちのなすべきことを責任をもって実行していかなくてはならない。子どもたちの未来に明るい光をもたらすことができるようにするために。